

# 非認知能力の育成を目指した特別活動の実践

～見学地から自分たちで決める班別活動を通して～

令和4年度榛東村立榛東中学校 第2学年

## 1 研究の背景

平成29年度、本校では、前校長の指示のもと、それまで第2学年で行っていた東京班別学習を見直し、中止することになった。その中止を決定した一番の理由は、東京班別学習中に、大地震等に被災した場合、生徒の安全が確保できないという点であった。当時、2年生は東京班別学習を楽しみにしていたため、中止になり行けなくなることに對して、多くの反対意見が上がった。しかし一方で、その生徒の意見をよく聞いてみると、「東京に行けなくなるのはさみしい」「今まで行けていたのに、なぜ今年に行けないのか」等、班別学習ができなくなることよりも、「東京に行けなくなった」ということへの意見が多かったのである。そのことから、今まで自分が指導してきた東京班別学習の生徒の感想を振り返ってみると、「楽しかった」という感想が圧倒的多数を占めており、このことから、今まで慣例として行ってきた、東京班別学習は、東京に行くことが目的になってしまっていたことに気が付いた。また、そのことが、特別活動としての東京班別学習において、本来つきたい力は何なのかを改めて考えさせられるきっかけとなった。

平成30年6月18日、7時58分39秒に、大阪府北部を震源とした、M 6.1 の大阪府北部地震が発生した。その時間、本校では、京都市内で修学旅行の最中であり、まさに、班別学習のスタートの直前であったため、出発を中止し、生徒を屋内に避難させた。京都市内も、震度5強の強い揺れに見舞われ、全ての公共交通機関は運行が停止された。京都駅前には、多くの観光客であふれかえり、大混乱の中、いつ再開されるかわからない公共交通機関を待つ長蛇の列ができていた。

ホテルの大広間で全員が待機をする中、安全が確認できた公共交通機関から、運航再開の知らせがホームページ等にアップされ始めた。生徒たちは、それらの情報を基に、今まで計画していたルートをすべて中止し、今日自分たちが班別学習できるルートをその場で、各班ごとに検討を始めた。すると、全ての班が30分もかからずに、新しいルートを作り上げることができた。

この体験から、私は大切なことを2つ学ぶことができた。1つは、災害対応教育の甘さである。幸いなことに生徒は出発する前であったために、ホテルで全員の安全を確保することができた。これがもし、班別行動中であった場合、生徒に対して地震に対する対応を伝えてはいたが、実際の各見学地でこの地震が起きていた場合、その後どう行動するのかは、まったく伝えていなかった。学校行事での活動は、生徒の安心や安全が何より最優先でなければならないのに、京都班別学習では、班別の行程調べや場所調べだけを行っていて、生徒の意識に、震災が起きた後どう行動するのかという災害対応意識を教えることが十分できていなかった。もう1つ学んだことは、今までの修学旅行における事前指導が本当に、生徒にとって必要な活動であったかということである。京都で迷子になったり、生徒が困らないように、学活の時間を何時間も使い、行先を決めたり、ルートを考えたりする時間を計画して実施してきた。それが生徒の安心・安全な修学旅行にするためには、必要不可欠な学習であると思い込んでいた自分がいたのである。つまり、授業と同様に、生徒に必要感があれば、ルートやコースなどは、たったの30分で出来てしまうのである。今まで教師が生徒のことを心配し、何時間もコースづくりをしていたが、それは、生徒の力を見誤っていたことに気が付いた。このことを通して、本当に必要な活動は何なのかを改めて見直すことができた。

令和2年3月2日、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、全国の学校が臨時休校となった。これまで、当たり前のように行われていた学校行事もすべて感染症対策のため、中止となってしまった。当たり前のように行われた学校行事がなくなった事で、改めて学校行事の大切さを再認識させられた。

令和3年10月、色々な学校行事が中止となる中で、感染症対策を取りながら、班別学習ができないか検討がされた。行動の自粛が求められる中、群馬県内での班別学習を模索し、校内で検討した結果、令和4年3月15日に高崎アリーナを拠点とし、高崎地区の巡回バスを活用した高崎班別学習を計画した。しかし、令和4年1月21日から、3月21日まで、群馬県もまん延防止等重点措置が適用となり、実施することはできなかった。

行事を検討する中で、「何で高崎なのか」という点が、議論に上がった。私たち、教師からすれば、感染症対策の観点で、班別学習ができるところを検討した結果、高崎になったのであるが、生徒からすれば、「なんで高崎班別なのか」という点である。授業の導入と同じで、班別学習をするとき、なぜ「高崎」なのかということ、今までは当たり前のように教師が決めていたが、そのどこで班別学習を行うのかも含め、生徒が自ら考え、班別行動を事前に計画・準備し、当日の活動を実践することにより自主的・自律的な態度を養うことができるのではないかと話し合われた。

これからの社会では、「VUCA（ブーカ）」時代の到来が予測されている。変化が激しく、あらゆるものを取り巻く環境が複雑性や曖昧性を増し、想定外のことが起こり、将来の予測が困難な状態が予測されている。これからの生徒は、そのような激動の社会を生きていかななくてはならない。そのためには、特別活動の本質を理解し、学校行事を通してより質の高い授業を展開していく必要があると考え、生徒の自主性・自立性を育てることを目指した取り組みの実践を研究することにした。

## 2 研究の目的

令和3年度より、新学習指導要領が完全実施となった。今回の改訂では、各教科等の学びを通して育成することを目指す資質・能力を三つの柱により明確にしつつ、それらを育むに当たり、生徒（児童）がどのような学びの過程を経験することが求められるか、さらには、そうした学びの過程において、質の高い深い学びを実現する観点から、特別活動の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（見方・考え方）を働かせることが求められることが示された。特別活動の目標についても、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」という三つの視点を手掛かりとしながら、資質・能力の三つの柱に沿って目標が整理された。そして、そうした資質・能力を育成するための学習の過程として、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して」資質・能力の育成を目指すこととされた。

そのような中、自分が今まで行ってきた学校行事を振り返ってみると、例えば、班別学習では、過去に自分が取り組んできた内容と大きな変化もなく、過去に行ってきた班別学習を、今回の改定に合わせて見直すこともせず、そのまま受け継がれる形で実施していた。特別活動という教科も、授業改善しなければならないのに、今回の改定に合わせた活動の見直しが出来ていないという課題点があった。

そこで、新学習指導要領の完全実施に合わせて、それまで行ってきた学年で行う班別学習について、新学習指導要領の改訂に合わせて、改善することとした。特に、改定の要点でもある「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」をキーワードとして、非認知能力を高められるように、学年の生徒で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、目標に掲げる資質・能力を育成することを目指すことを目標とした。

### 3 研究の過程

第2学年（4クラス学年生徒数113名）の班別学習（令和4年7月8日実施予定）の学習を通して、非認知能力の育成を目指すこととして、以下の目標を設定した。

<p>〔目標〕</p> <p>①〔人間関係形成〕</p> <p>生徒自らが、班別学習を事前に計画・準備し、当日の活動を実践することにより、自主的・自律的な態度を養う。</p> <p>②〔社会参画〕</p> <p>地域の自然や文化に触れることで、自分たちの住む地域を再評価することにつなげ、生徒の愛校心を高める。</p> <p>③〔自己実現〕</p> <p>校外での体験活動の中で、ルールや公衆道徳を守ることの大切さを経験させ、規範意識を育成するとともに、友達のよさを発見し、協働しながら集団の向上を図ろうとする態度を養う。</p>
---

特別活動の目標を踏まえて、「内容のまとめりごとの評価規準」を作成し、【学校行事「(4) 旅行・集団宿泊的行事」の評価規準】を以下のように定めた。

よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
校外における集団生活の在り方、公衆道徳などについて理解し、必要な行動の仕方を身に付けている。	旅行・集団宿泊的行事において学校生活や学習活動の成果を活用できるように考えて実践している。	日常とは異なる環境や集団生活において、自然や文化・社会に親しみ、見通しをもったり振り返ったりしながら、新たな視点から学校生活や学習活動の意義を考えようとしている。

そして、具体的な学習活動を決定した。

<p>〔中心となる学習活動〕</p> <p>①「1・学びがある」「2・公共交通機関を使った班別行動ができる」「3・学校からバスで2時間以内で行ける」「4・感染症対策がしっかりしている」という4つの条件を満たす見学地を各クラスで話し合い、学級委員会を中心に見学地を設定する。</p> <p>②実行委員を中心に、クラスごと班別学習を成功させるためのルールと目標について話し合い、班別学習のルールと学年目標を決定する。</p> <p>③各班の係分担を決めて、具体的な班別行動の内容を話し合い、決定する。</p> <p>④班別活動を成功させるために、自分がすべきことを具体的にまとめ、決定する。</p> <p>⑤公共交通機関の乗り継ぎや見学地でのマナーについて学習する。（新型コロナ対策を含む）</p> <p>⑥班別学習中の緊急時の対応の学習を通して、災害対応教育を行う。 災害対応教育では、平成24年5月改訂の学校災害対策マニュアル（群馬県教育委員会作成）を活用する。「171」の災害伝言ダイヤルの発信や、地震が起きた場合の待ち合わせ場所等についてを確認しておく。</p> <p>⑦事後学習では、班ごとに学習地で学んだことをふりかえり、成果や反省点等を高原学校の取組に生かす。</p>
---

そして、令和4年度、7月8日の班別学習に向けて、下記の単元計画を作成し、実施することとした。

班別学習指導計画 [全11時間計画]

日時	時間	主な学習活動	目指す生徒の姿	手立て(間接的指導を含む)
4/18	1	班別学習について知る。(オリエンテーション)【学年集会:オンライン】	新たな視点から班別活動の意義を考えようとしている。【主体態】	今までの決められた班別学習と違い、どこに班別学習に行くのかを含め、自分たちで考えることができるということを伝えることで、生徒に本学習のねらいや見通しを持たせる。
4/27	2	4つの条件に合う行先を調べ、クラスでの候補先を調べる。【学級活動:各学級】	社会科で学習した知識や、ICT機器を活用し収集した情報を活用して、条件に合う候補地を探そうとしている。【主体態】	4つの条件に合う見学地を探させることで、社会科で学習した知識や既習の経験を活用し、見学地を考えさせるようにする。
		【宿題】ICT機器の活用①[ロイロノート] タブレットを持ち帰り、条件に合う行先を考え、考えた意見をプレゼン資料にして仕上げてくる。		
5/9	3	自分が考えた行先についてプレゼンを行い、クラスでの案を決定する。【学級活動:各学級】	クラスでの行先案決定に向けて、話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図り、協働して実践している。【思・判・表】	見学地をクラスで一つに絞る過程を通して、決めようとしている見学地が、4つの条件に合っているか、また、全員が納得できる見学地になっているかを話し合わせるようにする。
		各クラスの意見を持ち寄り、学級委員会で学年としての行先を検討する。【放課後:学級委員会】 校長先生にプレゼンを行い、今回の班別学習の行先を最終決定する。【放課後:学級委員会】		
5/23	4	どんな班別学習にしたいかを各クラスで話し合う。また、実行委員を決める。【学級活動:各学級】	班別学習をさらによりよくするためには、ルールを決めたり、全員で協働して取り組むことの大切さを理解している。【知・技】	どんな班別学習にしたいのかを、具体化することで、4つの条件の中の「③学びある」の学びとは、何の学びなのかを明確にする。
		各クラスから選ばれた実行委員が集合し、実行委員長などの組織作りを行う。【放課後:実行委員会】		
5/30	5	実行委員の紹介を行い、本日の活動について、指示を行う。【オンライン】 実行委員からの指示を受けて、各クラスで、スローガンの案を話し合い、クラスの目標を決定する。【学級活動:各学級】	班別学習の成功に向けて、クラスの想いがこもったスローガン作りを通して話し合い、多様な意見を活かして合意形成を図り、協働して実践している。【思・判・表】	各クラスでのスローガンづくりを通して、班別学習を成功させるために、自分たちには、どんなことが出来るかを考えさせる。
		各クラスからのスローガン案を持つより、実行委員を中心に、今回の班別学習のスローガンを決定する。【放課後:実行委員会】		
6/1	6	実行委員より、スローガンの発表を行い、どんな班別学習にしたいかを伝える。【オンライン】班を決定し、係分担や班の約束事を決定する。	実行委員から発表されたスローガンや、各学級で決めた目標をもとに、学級における人間関係を形成し、よりよい班別学習になるように向上を図ろうとする。【主体態】	スローガンや各クラスの目標を基に、班や係分担を決めることにより、楽しむだけのバス旅行ではなく、物見遊山ではなく、よりよい班別学習にするという想いを育てる。
		【宿題】ICT機器の活用② タブレットを持ち帰り、班別コースについて考えてくる。		
6/8	7	班別コースを検討する。①【学級活動:各学級】	よりよい班別学習にするための話し合いの進め方、合意形成の図り方などの技能を身につけている。【知・技】	話し合いの時間を確保するため、見学地等について調べる時間は、各家庭にタブレットを持ち帰り、事前に調べておくこととする。
		【宿題】ICT機器の活用③ タブレットを持ち帰り、班別コースについて考えてくる。		
6/13	8	班別コースを決定する。②【学級活動:各学級】	班別学習の班や係決めについて、話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したり、実践している。【思・判・表】	話し合いの時間を確保するため、見学地等について調べる時間は、各家庭にタブレットを持ち帰り、事前に調べておくこととする。
6/20	9	班別活動時における緊急時の対応について学習する。【学年集会:全体】	班別活動時における緊急時の対応について理解している。【知・技】	災害が起きてから考えるのではなく、災害はいつ起きてもおかしくないという想定で考えることで、防災教育にもつなげる。
7/1		【宿題】災害伝言ダイヤル「171」活用 毎月、1日、15日の体験利用を活用し、実際に災害伝言ダイヤルを体験する。		
7/4	10	実行委員主催で、結団式を行う。【学年集会:体育館】	校外における集団生活の在り方、公衆道徳などについて理解し、必要な行動の仕方を身につけている。【知・技】	実行委員主催で結団式を行い、行事の目的や諸連絡を行うことで、生徒自らが考えたルールを守ろうとする意欲を高める。
		班別学習当日		
7/11	11	実行委員主催で、解団式を行う。【学年集会:体育館】	班別学習を振り返り、新たな視点から、学校生活や学習活動の意義を考えようとしている。【主体態】	実行委員主催で解団式を行い、実行委員の生徒より、協力に対する礼や称賛、反省を行うことで、みんなで行事を成功させたことを確認し、所属意識を高める。

#### 4 研究の成果

(1) 行先を決めるところから、考えることで、生徒はより自主的、実践的に取り組めることがわかった。【2時間目終了時】

以下は、4つの条件に合う見学地を考える授業を行った（2時間目の授業）時の生徒のふりかえりである。

- ・旅行先を決めるのは、けっこう大変なのだと思います。コロナや時間のことも考えて、学べて楽しいところがいいです。家でも少し調べてみたいです。
- ・自分たちで決められるのは嬉しいけど、条件に合うところを考えるのは大変でした。公共交通機関を使った班別行動の時点で遊園地はたぶん無理だと思いました。楽しい班別学習にできたらうれしいです。
- ・ここがいいなと思っても、4つの基準のどれかに当てはまっていなかったりするので難しいなと思いました。でも、群馬のまわりにどんな歴史的な名所や観光地があるか少しは分かったので良かったです。
- ・行先を考えるのがこんなに大変だと思いませんでした。
- ・自分たちで行く場所を決められるのはいいですね。でも、100人以上いる中で1つの意見に絞るっていうのはとても難しいことなので、みんなでちゃんと話し合いたかったです。
- ・自分たちで行先を考えるのは難しいなと思いました。班別学習を楽しめるようにしっかりと計画を立てたいです。
- ・遊びで行くのではなく、勉強としていくことを考えるとそんなに思いつかないし悩みました。自分たちで班行動もできるので、もっといろいろ調べたいです。

今まで行ってきた、東京班別学習では、行先を考えることなく、東京に行くことが決まっていた。しかし、今回の班別では、行先を考えるところからのスタートである。教師にとって、行先を生徒に任せてしまうことは、ひょっとしたら「デイズニーランドに行きたい」などという、とんでもない見学地を考えるのではないかという不安はあった。しかし、見学地についても、4つの条件を明記することで、生徒は教師の決めた条件の中で考え、深い学びをしていることが分かった。学習後のふりかえりを分析すると、行先を決められることによって、期待感が高まり、より自主的に取り組もうとする姿がみられた。また、見学地についてはどこでもよいということではなく、4つの条件の中から選択させたことによって、例えば、「遊園地」に行きたいなと思っても、条件に照らし合わせて考えたときに、その見学地が適切なのかを自分たちで判断しながら、考えている姿が見られた。特別活動のいずれの活動も、生徒が自主的、実践的に取り組むことを特質としているが、生徒自らが課題を見出し、その解決方法について話し合っている様子も見られた。

大きな成果点といえることは、「自分たちで場所を決められることはいいことなのだが、100人以上いる中で、意見を1つに絞るといふことの難しいということ」に多くの生徒が気がつけた点である。「全員でよりよい班別学習にする」ためには、行先は1つにしなくてはならない。色々な意見が違ふ中で、学年としての全員が納得する見学地を決めるといふことは、まさに、今の生徒に求められている力であると考えられる。そして、この難しい難問に立ち向かおうとする姿が多くの生徒に見られたことは、とても良いことである。

(2) 1人1台端末によって可能となった、家庭学習での調べ学習

過去の班別学習では、コースや見学地を調べることに多くの学習時間を使ってきた。当時は、調べるにもパソコン室には、パソコンが40台しかなく、図書室の本と、パソコン室をクラスごとにローテーションする形で見学地調べを行っていた。しかし、1人1台端末とった現在は、各家庭に持ち帰っても全員が同じ条件で調べ学習をすることが可能となった。そこで、今回の見学地決定における候補地調べと自分の考えをまとめたプレゼン資

料作りを宿題として取り組ませることとした。取り組ませた宿題は、インターネット等を活用し、その見学地までバスでかかる時間等を含め、行きたい見学地が4つの条件に当てはまっているかどうかを考えることと、その調べたことを、授業支援ソフト「ロイロノート」の1枚の資料にまとめてくることである。生徒は、各自下のような資料をまとめることが出来た。

<p>集合解散の場所候補</p> <p>①本川越駅 名所が集まる場所に近い。</p> <p>②川越駅 バスがよく通る。小江戸川越名所めぐりバスはここがスタート地点。</p> <p>公共交通機関</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本川越駅</li> <li>・川越駅</li> <li>・川越市駅</li> <li>・小江戸巡回バス</li> </ul> <p>観光バス。蔵の街を先に通るルートと喜多院を通るルートの2つがある。 ただ、当面の間、平日は運休すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小江戸川越名所めぐりバス</li> </ul> <p>観光バス。蔵の町、喜多院、川越氷川神社などの名所をまわる。 乗り降り自由。</p> <p>お土産 まんじゅうなどの食べ物はもちろん、風鈴（川越氷川神社 2000円とすし値が張る）や着物の生地を使った小物などもある。どの店も蔵造りの町への途中にあるので買いやすい。</p>	<p>【バス旅行行き先】</p> <p>東京</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バスで2時間以内 2時間くらいで行ける。</li> <li>・公共交通機関 鉄道・バス・モノレール・タクシー・飛行機・船と、様々な交通機関があるから。 東京23区内の私鉄などはひんぱんに運行されて、3分～10分程度待てば乗ることができるから。</li> <li>・学びがある 国立科学博物館・東京国立博物館など、様々な場所があるから。</li> <li>・感染対策がある コロナウイルスの感染者数が多いが感染対策がきちんとしていておおいところが多いから。</li> </ul>
--	---

(3) 自分たちの見学地決定に向けて、集団による合意形成の難しさを知るとともに、異なる意見や意志をもとに、様々な解決方法を模索し、問題を多面的・多角的に考えて、合意形成を図ることが出来た。【3時間目終了時】

各クラス毎に、学級委員が中心となり、見学地を決める話し合いが行われた。各班ごとに、自分が考えてきた見学地についてプレゼンを行い、班の意見を決定した。その後、各班ごとの意見から、各クラス毎の意見を集約した。新潟、栃木、長野、東京、埼玉、神奈川等生徒の考えてきた見学地は、実に多方面に渡っていた。1人1人が真剣に見学地を考えてきてくれた中で、「1・学びがある」「2・公共交通機関を使った班別行動ができる」「3・学校からバスで2時間以内で行ける」「4・感染症対策がしっかりしている」という4つの条件を満たす見学地を話し合った。特別活動では、集団における合意形成の大切さを指摘されているが、この見学地を決める活動は、学年みんなが楽しい班別学習にするという共通のテーマに向けての話合い、合意形成を図る活動として、とても有効であることが分かった。

各クラスでの意見集約の後には、学級委員会で各クラスの意見を持ち寄り、最終候補地の決定に向けての話合いを行った。各クラスからは、東京方面という意見が2クラス、軽井沢が1クラス、川越が1クラスという意見が出てきた。多数決的には、東京が決定になるが、学級委員会での話し合いでは、東京が一番学びがあり、行きたいという意見も多かったが、感染者が多く心配であるという意見から、東京は候補から外れた。また、軽井沢では、公共交通機関が少なく、自分たちで班別活動が十分にできないということから、候補から外れた。川越は、バスで2時間以内で行けて、学びがあり、そして、川越周辺にも鉄道網があり、川越独自の感染対策がしっかりしている点も生徒の中で評価され、川越に決定となった。その話し合いでは、全員が楽しめる班別学習になるためにという視点で、多面的・多角的な合意形成を図ることができた。

(4) 校長先生へのプレゼンでの最終決定



見学地は、自分たちで決めたから決定ではない。中学校生活における自治ではあくまで「自治的な活動」である。教員の適切な指導を前提としたその範囲内での決定であり、その活動の最終責任者は校長となる。そのため、見学地を決めるにも、生徒が校長先生へのプレゼンを行い、その内容を経て見学地の最終決定とした。

(5) 113人の意見をまとめる過程を通し、大変さや難しさを知る。【4時間目学習前】



自分たちがまとめた意見を校長先生に認められることで、学年としての所属感や連帯感が高まった。コロナ禍で、学年全体が集まることは出来なかったが、オンラインにて、見学地が決まった経緯を全体に周知し、生徒からも歓声が起こった。

(6) どんな班別学習にしたいかを考える。【6時間目】

皆で考えまなび、  
礼儀正しく協力し合う、  
笑いの絶えないバス旅行  
にしよう！

川越班別学習スローガンの意味



各クラスで話し合い、実行委員が最終決定したスローガンは、「笑礼協学」に決まった。スローガンの中にも、生徒の想いが込められていた。教師がしっかりと見通しを生徒に持たすことが出来れば、生徒は班別学習を学ぶの場として捉え、自分たちでよりよいものにしようとする姿が現れることが分かった。

(7) 起きてから考えるのではなく、起きることを想定した災害対策計画を実践する。



2011年に発生した東日本大震災より12年が過ぎ、現在の中学生は、当時の被災した記憶がほとんどない。国土交通白書2020によると、地震調査研究推進本部地震調査委員会で、首都直下地震で想定されるマグニチュード7程度の地震の30年以内の発生率は、70%程度だと言われている。ちなみに、これは、2020年1月24日時点の予測で、データによっては90%以上というものもある。

1の研究の背景にも記載したが、修学旅行で体験した大阪北部地震では、災害対応教育の観点から、教員の見通しが大変甘かったことを猛省した。生徒には、各班毎にスマホ等を配付し、緊急時には、連絡を取れるようにしているが、それで十分であるとはいえない。実際に大地震が起こると、連絡さえ取れない

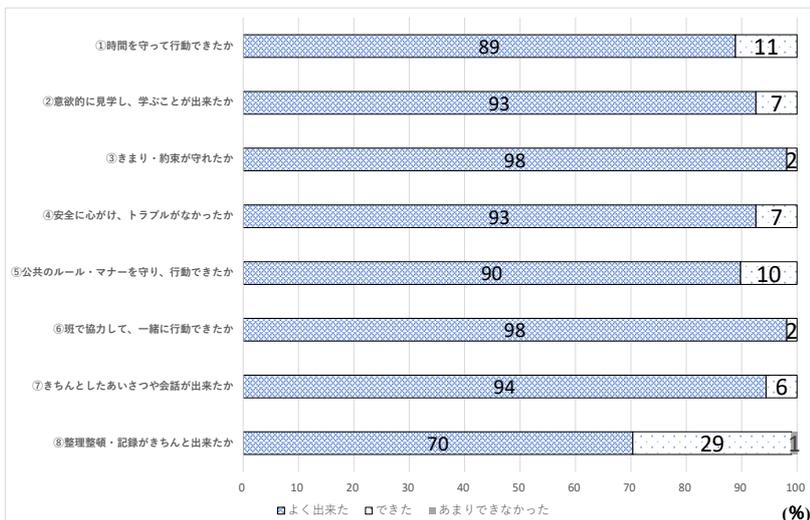
事態が起こりうるのである。また、そんな中、生徒が何をしてよいかもわからず、連絡が来るのを待っているようではいけないのである。

学校管理下において、生徒の安心・安全は、最優先事項でなければならない。生徒主体の班別学習でも、ここは、教師の指導しなければならないところである。そこで、班別学習にあたり、以下の項目を実施することができた。

- ①各班にGPS機能付きのスマホの配付した。
- ②震度5以上の地震発生で班別活動の中止することの事前決定と、その場合の各地区毎に担当教員との待ち合わせ場所の指定、または、該当地区の指定避難場所の把握を行った。※万が一に備えて、しおりの資料として綴じ込むこととした
- ③電話が繋がらなくなることを想定した、災害伝言ダイヤル「171」の事前訓練の実施を行った。

(8) 非認知能力の育成につながったか(班別学習を終えて)

令和4年7月8日、川越班別学習に無事に行ってくることができた。当日は、大きな地震等もなく、生徒も予定していた班別学習を行うことが出来た。それまでの東京班別学習では、見学地を調べたり、班別のコース作りに多くの時間を費やしていたが、上記のような単元計画で、見学地を決めたり、スローガンやどんな班別学習にしたいかなど、特別活動の目標にせまる活動を展開するなかで、班別活動が安全に実施できたことは、とても大きな成果点であるといえる。



左記の資料は、班別学習を終えての生徒の自己評価の記録である。⑧の記録がきちんと出来たかの項目が低くなっているが、こちらについては、班別行動が忙しかったために、記録する時間がとれなかったという反省が多くみられた。しかし、他の項目は90%をこえる生徒がよく出来たと回答した。このことから、成果点としてとらえることができる。

以下は、班別活動を終えて書いた生徒のふりかえりである。

・実際に行ってみると、時間がなく少し不安で自分たちだけで電車やバスに乗るのも不安だったけど、1回乗るとそこからなれて速く行動できるようになりました。今回の活動で自分の世界が広がり、「もう自分は1人で電車に乗れるんだ」と思えるようになりました。また、友達との協力の大切さもわかりました。7月8日だけで、かなりの成長がありました。今日の経験は、これからの人生でとても役に立つことだと思いました。

・今回は初めての班だけの活動でした。ちゃんと調べてはいたけれど、来たことのない慣れない場所なので迷ってしまったときもあったが、最終的にはちゃんと目的地にたどり着くことが出来ました。結構歩いたけれど、今日の活動で協力の大切さと成し遂げたときの達成感を得ることが出来ました。

・道がわからなくなったりしたけれど、班で協力し、スマホのナビを使って確認しながら目的の場所へ予定していた時間より早く移動することが出来ました。また、自分たちで考え、動くことができました。また、班で決めた約束を守り、班のみんなで常に動いてはくれることなく班活動ができました。協力し、仲を深められたと思える班別活動が出来て良かったです。

・最初に行った見学地の「青い鳥」では、ものを作ることと時間について学びました。青い鳥では、サンドブラストというコップに柄をつける作業を行いました。サンドブラストの体験は、コップを選ぶというところから行いました。そして、デザインを考え、模様をつくりました。ものをつくる大変さを学びました。そして、11時50分のバスを予定していたけれど、間に合いませんでした。そこで、時間の大切さを学びました。そして、町の人に次のところに行く方法を聞いて教えてもらいました。そのとき、町の人々の温かさを感じました。自分もこれから榛東で困っている人がいたら、同じように声をかけてあげられる人になりたいです。

・行く前は、「暑いだけで、あまり楽しめなさそう」と正直思っていたけど、今までの班別学習や修学旅行の中で、一番楽しかったです。全てを自分たちで判断して行動し、先生方に頼る場面が少なかったため、プライベートのような感覚でありながらも、学校行事であることを頭に入れて友達と楽しめました。昼食場所や見学場所の全てを今まで自分たちで決めて計画してきたので、どこか達成感のようなものがありました。また、普段あまり話せない友達とも、今回を通してさらに仲を深めることが出来ました。本当に最高の班別学習でした。計画してくれた実行委員や先生方、班長や班の仲間には、とても感謝しても感謝しきれません。

このように多くの生徒が振り返りに、今回の班別学習で立てた3つの目標のねらいに迫

るふりかえりが書けていた。この結果からも、生徒自らが班別行動を事前に計画・準備し、当日の活動を実践することにより、自主的・自律的な態度を養うことが出来たといえる。

学年としては、コロナ禍で1年次には全ての学校行事が中止となってしまった。今回の班別学習では、学年としての初めての行事であったが、この行事で成長した姿は、次の行事ともつながっていった。9月に実施した高原学校では、企画運営をすべて実行委員が中心となり、全ての生徒が何らかの係として参加する、生徒自主運営の高原学校を実施することができた。このことにも、班別学習を通して獲得した経験や知識の活用、そして何より生徒自身が班別活動を通して、達成感を感じ得た自信が活かされたと考えられる。また、3年次の修学旅行では、実行委員を組織し、2年生での班別学習の経験を活かした自主的な運営ができるようになった。例えば、実行委員を中心に班決め決め方等を確認し、1日目の広島班別学習の班、2日目の京都班の決定することができた。また、3日目の京都タクシー班別学習では、クラスを解体して、学年全体で4人組の班を、決めることができた。うまくペアが組めない生徒が出ないかどうか心配されたが、実行委員が事前にいろいろと根回しをしたり、相談したりしながら決めることができた。また、実行委員だけでなく、3年生全員が思いやりの心をもって活動に臨んでくれたことも決めていくうえでの大きな原動力となった。また、新幹線の座席決めは、貸し切りになる車両と、一般のお客さんが乗っている車両と別れることになり、一般客がいる車両は、マナーとして静かにしなければならないということが求められる。今までは、クラスで割り当てて新幹線座席を決めていたが、今回はこの新幹線の座席決めも、実行委員が中心となり、全員の合意形成を図りながら決めることができた。このように班別学習で得た学びを高原学校や3年次での修学旅行にも活かすことができたことも、班別学習の大きな成果といえる。

また、学級委員と実行委員として中心となって活動してくれた生徒は、次のようにふりかえり、1学期の終業式で、次のように話してくれている。

僕は2年1組の学級委員になりました。中学校で、学級委員をするのは初めてで、クラスをまとめることの大変さを知りました。それと同時に班別学習の行先を決めるという仕事もありました。コロナ禍で、1年生の時から延期を重ねてきたので、113人の期待を背負った行事の大部分を決めるのは、重大なことでした。様々な条件の中で、川越、軽井沢、東京の中から行き先を決めることになりました。条件の中に「班別に行動できる」というものがありました。班ごとに別々の場所へ見学へ行くという条件で、東京が行き先に最適ということになりました。しかし、感染症対策等で川越になりました。校長先生にも許可をとり、行き先決定という係は終わりました。ですが、行先が決まったただけでまだすべてが終わったわけではありませんでした。その後の実行委員が他の仕事することになりました。僕はもっと班別学習の企画に携わりたいと思い、班別学習実行委員副委員長になりました。実行委員になって、スローガン決め、班の作り方などを考えました。そしてスローガンは「笑礼協学」に決まりました。この2か月間は大変な2か月でした。7月8日、班別学習の日、この日のために僕たちは頑張ってきました。僕の班も、少しトラブルはありながら、楽しみ、学ぶことができました。無事全員帰ってくることができ安心しました。2か月間班別学習に向けて、最善を尽くすことができ、個人的には成功した班別学習だったと思います。様々なことに携わることでできた行事で、みんなが笑顔になってくれたことや絆が深まってくれたということから、努力が報われたような気がしました。2学期は高原学校などの行事があります。今回の経験を活かせるようにできることをしていきたいです。

このように実行委員会は大変であったが、実行委員として活躍してくれた生徒にも大

きな成長がみられたことは大きな成果であるといえる。

このように、班別活動の単元計画を工夫することで、生徒自らが考え、判断し、見学地をプランニングすることができた。見学地を決める過程では、いろいろな方面の見学地が候補地として上がる中、多様性を尊重し、対話を通して見学地を1つに決定することができた。また、見学地を決定するにあたり、ICT機器を活用し、色々な見学地の情報を必要感をもって調べることで、生徒の中に新たな考えを創造することができ、対話することで考えがより広がる場面も見られた。このように、今まで行ってきた班別学習の単元計画を改定に合わせて見直すことによって、自分と他者をさらにかげがえのない存在として認識できるようになり、自ら考え、判断して責任ある行動を取る人に慣れたと考えられる。このことから、班別学習を通して、生徒の非認知能力を高められたと考えられる。

## 5 今後の課題・展望

群馬県でも非認知能力の育成を目指した研究が始まり、社会の在り方が大きく変化し、未来を生きるために必要となる非認知能力の育成がますます求められるようになってきた。本実践では、既習の単元計画を学習指導要領に合わせて見直すことで、実践を可能とした。その中で課題点としては、調べ学習の時間を例年の半分以下に減らし、タブレットを各家庭に持ち帰り、見学地や班別のコースを宿題で調べられるようになった。しかし、各家庭での取組には進度差があり、例えば、生徒に宿題で出したからと言って、コース決定について、教員が全く関わらないということには出来ない。やはり、安心・安全が最優先である学校行事の中で、間違ったコース設定をしている生徒には、事前にそのコースを修正させる必要がある。調べ学習やコース作りの時間が減らせたからと言っても、また、生徒の自主性に任せていると言っても、コース決定に関わる最終責任は教員にあり、そこは、教員の指導が今まで通り変わらず必要なところである。また、生徒が話し合っただけでは、授業時間の確保が必要であり、2時間計画でコース決定を考えたが、実際は3時間かかってしまった。また、生徒の自主性に任せる班別学習を成功させるためには、普段からの学級経営、学年経営が大切であり、その基礎の上に班別学習がさらに生徒をよりよいものにしてくれるという点も注意が必要である。

近年、地球温暖化が進み、猛暑日も増加している。7月の上旬でも40℃に迫り、熱中症警戒アラートの発令日も増えてきた。そのような中、班別活動中の熱中症についても深刻な問題であるといえる。

## 6 おわりに

コロナ禍において、感染症対策のため、多くの学校活動が中止となった。しかし、コロナ禍が開け、多くの学校行事を復活させることが出来た。しかし、失われた3年間という表現があるように、今の3年生も先輩からの伝統が途切れ、学校行事も1からの再構築が求められている。そのような中、コロナ禍で失われた学校行事を始めとする特別活動の重要性が再認識されている今日において、過去から受け継がれてきた学校行事をそのまま復活させるのではなく、新学習指導要領に合わせて、過去の行事を再検討し、単元計画を作り直すことが現在求められているのではないだろうか。

さらによりよい学校行事、特別活動の充実も、これからの社会を担っていく生徒に求められている力をつけていく上で大切なことだと考える。

## 7 参考文献

- ・ 嶋野道弘 著『学びの哲学「学び合い」が実現する究極の授業』東洋館出版社2018
- ・ 国立教育政策研究所 「学級・学校文化を創る 特別活動【中学校編】」